

静岡県立大学附属図書館

シリーズ 私の一冊の本

食品栄養科学部 田村 謙太郎 先生

佐々 涼子 著

『 エンド・オブ・ライフ 』

草薙閲覧室 1階 916//Sa71 集英社インターナショナル

あなた自身やあなたの大切な家族や友人が最期を迎える時、いつどこでどのように向き合いますか。

本書は、ノンフィクション作家である著者が7年もの歳月をかけて在宅医療の現場取材したルポルタージュです。終末期医療における患者とその家族、医療従事者の姿が生々しく描かれています。物語の中心となるのは、京都の診療所で訪問看護師として働く森山文則さん。彼はこれまで200人以上の患者を自宅で看取ってきた「看取りのプロフェッショナル」です。しかし、ある日、彼自身がステージ4の膵臓がんであると宣告され、「看取る側」から「看取られる側」になります。

「死」というテーマは重く、避けてしまいがちですが、本書が描き出すのは、決して暗く悲しいだけの物語ではありません。例えば、「死ぬ前に家族と潮干狩りに行きたい」という末期がん患者さんの最後の願いを、医療チームがどうにかして叶えようと準備奮闘するエピソードが紹介されています。住み慣れた自宅で最期の時間を過ごす「在宅医療」の現場では、単に延命を目指す「治す医療」だけではなく、患者さんが自分らしく生き抜くことを支える「治し支える医療」が実践されています。そこには、患者さんと家族、そして医療従事者との間に悩ましい葛藤とそして温かい心の交流があります。

「看取りのプロ」であった森山さんでさえ、自身の死をすぐには受け入れられず、死期が迫るとともに心が大きく揺れ動きます。その等身大の姿は、私たちに「死の受容」の複雑さと、それでもなお希望を見出したい人間の脆さを教えてくれます。彼は最期の日々を家族と共に過ごします。その姿は、理想の「命の閉じ方」とは何かを静かに問いかけてきます。

いつか必ず訪れる「死」について考えることは、家族や友人といった大切な人々との関わり方を見つめ直し、残された人々の人生について考える多くのきっかけを与えてくれます。